法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

ディルタイ哲学の現代的意義 : 歴史的理性批判の射程

MAKINO, Eiji / 牧野, 英二

(出版者 / Publisher)
法政大学文学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要
(巻 / Volume)
49
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
23
(発行年 / Year)
2004-03-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002912

Hosei University Repository

ディルタイ哲学の現代的意義

― 歴史的理性批判の射程 ―

牧野英二

一　はじめに：問題提起

本稿の課題は、筆者にとって当惑を禁じえないほどの難問であるように思われる。「ディルタイの哲学史的意義」というテーマであればともかく、「ディルタイ哲学の現代的意義」という課題について正面から回答しようとすれば、考察すべき問題があまりに多くかつきわめて困難な疑問を惹起するからである。そこで本稿では、問題の所在と回答へのアウトラインを示すことで筆者に科せられた責務を果たすことにしたい。本題に立ち入る前に、問題提起と考察方法の説明を兼ねて若干の予備的留意点に言及しておこう。

まず第一は、ディルタイ自身がすでに取り組んでいた学問論（Wissenschaftslehre）としての哲学と人生論としての哲学との二元論に関わる問題である。日本では、これまで経験したことのない少子高齢化社会を迎えつつあり、とりわけ定年退職後の約二〇年間をどのように生きるべきかという人生の意味が改めて問い直されている。また、若者には高齢者の老後生活を保障する年金制度に対する不信感が急速に高まっており、それとも関連して青少年の間に生き

Hosei University Repository

甲斐の喪失現象ともみられるネット心中などの特異な社会現象が頻発しているのが現状である。さらに誕生から死に至るまで人間が医療技術によつて管理され、クローン人間の誕生すら囁かれる今日、古来、生・生命・人生（Leben）の意味を根本的かつ総合的に考察してきた哲学・倫理学の役割は、ますます高まっていると言えよう。

ところが、こうしたきわめて重要な社会的要請を担っているはずの哲学・倫理学などの哲学的諸学問の教育・研究の現場は、応用倫理学・臨床哲学等の一部の領域を除けば、充実しているどころか、これらの学問の研究・教育の場そのものが衰退し消滅の危機に曝されているのが実情であろう。本稿は、これらの課題に答えることを意図しているわけではない。しかし現在哲学研究と哲学教育に携わってる人間は、このような状況を的確に把握して、さまざまな立場と方法に基づいて、生・生命・人生の意味を根本的に問い直すことが求められている、と言えよう。本稿は、ディルタイ思想とその「生の哲学」（Philosophie des Lebens）の再検討を通じて、これらの課題に取り組むための基礎的作業の試みでもある。

第二は、ディルタイ自身が「歴史的理性批判」と呼んだ試みと「生の哲学」、とりわけ「心的生」（Seelenleben）およびその「体験」（Erlebnis）との関係を再検討することにある。周知のようにディルタイの思想は、従来「生の哲学」と呼ばれる思潮に属するとみられてきた。ディルタイを「生の哲学」の代表的人物とみなす見解は、彼を肯定的に評価するにせよ、否定的に批判するにせよ、いずれの立場に立つ場合でも、共通した哲学史的な通説であり、常識に属する事柄である。また、二十世紀哲学の一般的な理解によれば、非合理主義的な「生の哲学」は「実存主義」ないし「実存哲学」によって乗り越えられた過去の哲学思想の一形態にすぎないとみられてきた。この点についても、改めて検討する必要のない哲学的確信になっている。だが、今日こうした「確信」こそが問い直されなければならない。

第三は、とりわけガーダマーの『真理と方法』以降ほぼ通説化したディルタイ批判の基本的視点に関する論点である。簡単に言えば、晩年のディルタイは確かに解釈学的方法を哲学的に導入したが、依然として自然科学的な客観的

Hosei University Repository

な真理観に囚われており、所詮ハイデガーなどに与えた哲学的解釈学の先駆者としての意義にとどまる、とみるのが一般的な見解であろう。

しかし、「ディルタイ・ルネサンス」と呼ばれる近年のディルタイ研究の成果は、第一に、こうした見方がたんに一面的であるだけでなく、第二に、ディルタイ思想の重要な意義を見逃しており、第三に、今日の哲学的思索にとっても有意義な示唆を与えた事実を覆い隠してきた実態を明らかにしつつある。実際、「ディルタイ・ルネサンス」のグローバルな展開は、二〇〇三年から刊行を開始した日本語版ディルタイ全集以外に、早くから刊行された英語版の著作集やフランス語版、イタリア語版、ロシア語版の著作集やオランダ語訳、スペイン語やポルトガル語訳の主要な著作の刊行など広範多岐にわたる一次文献の翻訳からも、その一端を窺うことができる。そこで本稿では、全三十巻の計画で今日二十三巻まで刊行されているドイツ語版全集[1]の既刊の遺稿類から浮かび上がってきたディルタイ像に光を当てることによって、従来のディルタイ評価や批判の一面性を指摘し、従来のディルタイ解釈によって隠されてきた重要な意義の再評価と今日の哲学的思索との積極的な関係を解明してみたい。それによって従来の解釈では十分解明されなかった、知のあり方をトータルに捉え直そうとした「歴史的理性批判」の営みの射程を測定することも可能になるであろう。

結論を先取りして言えば、この営みは第一に、非合理主義的な生の哲学とは異なり、第二に、たんに精神科学の基礎づけの学にとどまらず、第三に、自然科学を含むあらゆる知の可能性の条件を問う壮大な試みであった。第四に、こうした学問論、科学論の試みは、人生論とも不可分であり、第五に、優れて実践的な意図のもとで歴史的社会的現実をさまざまな生の「自己省察」（Selbstbesinnung）という心理学的分析から解釈学的な方法によって明らかにしようとした、いわば「総合人間科学的な知」の試みの弛みない努力の成果であった。

Hosei University Repository

二　ディルタイ像の変遷と論争点の移行

ディルタイ哲学の評価や歴史的および今日的意義を再検討する場合に、確認しておくべき幾つかの論点がある。端的に言えば、ディルタイの生前および没後にわたり、その思想や解釈・評価をめぐって大きな変遷があったという点である。まず第一に、ディルタイは哲学者というよりも歴史家であった、という評価についてである。『シュライアーマッハーの生涯』第一巻（一八七〇年）以来、ディルタイは精神科学の重要な歴史家とみなされてきたが、体系的な哲学者としてはみられていなかったことは周知のとおりである。この伝統的な評価、ディルタイ像は、大方の予想を超えてその後も実に大きな影響を与えてきた。例えば、ハンナ・アーレントは、ディルタイ思想全体の紹介を英語で初めて試みた書物、ハーバート・ホッジス『ヴィルヘルム・ディルタイ。序論』[2]に対する書評「哲学者および歴史家としてのディルタイ」[3]の中で、ディルタイは哲学者というよりは歴史家である、と述べている。また『人間の条件』の中ではディルタイを「生の哲学者」に属する思想家から除外している。そして「近代の生の哲学の最大の代表者は、生命と存在とを同等視している限り、マルクスとニーチェとベルクソンである」[4]、と主張している。しかし、これらの見解はどこまで妥当であろうか。

第二に、周知のようにディルタイの第一の哲学的主著『精神科学序説』第一巻（一八八三年）の刊行年に、ヴィンデルバントは『プレルーディエン』のなかで「歴史的理性批判は大いに賞賛されるべき試みであるが、それはあくまでひとつの批判にすぎず、また批判であるかぎり、この試みには規範が必要である」[5]、と批判している。ディルタイの発生的心理学には普遍妥当性を基礎づける規範が欠けているという批判の刃を突きつけたのである。また、彼の弟子のハインリッヒ・リッケルトは、ディルタイ没九年後に『生の哲学』（一九二〇年）のなかでディルタイなどの生

Hosei University Repository

の哲学が現代の哲学における流行思想であると解釈しており、その批判を試みている。因みに、この書のサブタイトルは「現代における哲学的な流行思想の叙述および批判」と名づけられている。著者は、生そのものが流行概念であり、ディルタイの生の哲学は生物学主義であると批判している。そしてリッケルトもまた、アーレントと同じく「ディルタイは哲学者であるよりもむしろ歴史家である」という主張を展開したのである。[6]

アーレントやリッケルトによるディルタイの評価は、両者の理由づけの相違を差し当たり度外視すれば、両者とも共通であり、こうした評価そのものは、両者に限らぬ長い間のディルタイ評価のカノンであった。本稿では、こうしたディルタイ解釈上の通説的な見解を個別的に検討することを意図するものではなく、むしろこれらの歴史家としての批判的評価とは異質な意味で、今日歴史哲学者としてではなく、歴史の物語り理論の先駆的な意義をディルタイに見いだす試みがあることを示唆しておきたいのである。[7]

第三に、ディルタイを解釈学との関係から把握する見方が出てくるのは、死後十年以上経過して一九二三年に刊行されたディルタイ全集第五巻（タイトル『精神的世界　生の哲学序論』前半　精神科学の基礎づけのための諸論考』[8]）の編者ゲオルク・ミッシュによる浩瀚な「序論」（Vorbericht des Herausgebers）が、「心理学から解釈学へ（von der Psychologie zur Hermeneutik）」（V, IX）というディルタイの思索の解釈の発展図式を確立したことが大きく影響している。また、同年に『ヨルク・フォン・ヴァルテンブルク伯との往復書簡』が刊行され、この書物によって「歴史的理性批判」がディルタイの哲学的思索の中心課題であることが認識されるにいたった。[9]

全集第一巻に収録された『序説』第一巻では、ディルタイはカントの純粋理性批判やその試みとアナロガスなタイトルから推測されるような誤解を解くための努力を怠っていたわけではない。因みに、第二巻は未公刊の完成稿が全集第十九巻に収録されて、ほぼ百年後の一九八三年にようやく日の目をみた。それによってようやくこの書物の全体像が正確に把握されることが可能となったのである。この文献学的な特殊状況もまた、ディルタイの思索を正確に把

Hosei University Repository

握するのを困難にさせてきた大きな要因であった。全集第十九巻の編者が看破したように、『序説』の主題的論述は第二巻にある。また、ディルタイは決して歴史哲学者と解釈されてもならない。なぜなら、『序説』第一巻でも明確に批判しているように、いわゆる歴史哲学とは、次のような学科を意味したからである。第一に、それは歴史的全体を統一性として認識しようとする企てである。それゆえ第二に、歴史的経過や諸変化を一つの定式によって把握して唯一の原理へと還元しようとする。第三に、歴史の意味ないし歴史的な経過の価値および目標を有機的に分節化しようとするのである。[10]

要するに、ディルタイはこうした歴史哲学的な探究を企図したのではなく、まず精神諸科学の認識論的な基礎づけを試みたのである。しかしこの試みの内実と方法は、心理学的な基礎づけから解釈学的な方法の試みへと徐々に変容を遂げたものの、ディルタイは最晩年にいたるまで「歴史的理性批判」の試みを捨てることはなかった。ここでは彼の試みの一断面を今日の哲学的文脈から改めて考察することにしよう。

三　ディルタイとポスト形而上学的思考

ここでの狙いは、ディルタイのポスト形而上学的思考の意義を照らし出すことにある。それによって、哲学史におけるディルタイ解釈の変貌がおのずから露わとなるであろう。以上のような試みを遂行するために、一九八八年に刊行された『ポスト形而上学的思考』[11]というユルゲン・ハーバマースの論文集で展開されたディルタイ批判を手がかりにして、ディルタイ哲学とポスト形而上学的思考との関係に立ち入ってみたい。[12]

周知のように、この書物でハーバマースが指摘する哲学の伝統的思考との断絶を特徴づけるモティーフは、「ポスト形而上学的思考」(nachmetaphysisches Denken)、「言語論的転回」(linguistische Wende)、「理性の状況化」(Situierung

Hosei University Repository

der Vernunft)、「実践に対する理論の優位の逆転」(Umkehrung des Vorrangs der Theorie vor der Praxis) の四点であった。[13] そのなかで名前を出して明示的にディルタイの批判を試みたのは、まず第一に理性の状況化に関する議論である。「超越論的意識を言語、行為、身体などに「具体化」して考え、理性を社会と歴史へと位置づけて状況化する試み」の一つの流れとして、「ディルタイを経てガダマーに至る路線で展開されてきた」(三二頁) と指摘している。しかし、ここではディルタイに対する直接的な議論はみられない。

別の箇所では、ディルタイの歴史的理性批判の試みに着目している。「普遍性・超時間性・必然性といった形而上学的な属性は超越論的主観性の超世界的位置づけへと転移されていたが、この位置づけは、まず最初に、新しい精神科学の諸前提と衝突した」(五八頁) 事実を指摘して、そのことによってディルタイには歴史的理性批判が要請される、とみなす。ハーバマースによれば、「ディルタイは、根源をもたずあらゆる偶発性と自然必然性を免れた総合的な働きがいまや世界のなかに場所を見いだすことができ、それでいてその働きと世界構成の過程との内的結合を放棄する必要がない」(同箇所) という点に、超越論哲学の基本概念を改訂しようとする試みを看取している。要するに、歴史主義と生の哲学は、伝統の媒介、美的経験、個人の身体的・社会的・歴史的実存などに、超越論的主観の古典的概念を破砕せざるをえない認識論的意味を付与した。しかし、「超越論的な総合に代わって現れたのは、「生」の生産性であるが、それは一見すると具体的だがそのじつ構造を欠いていた」(同箇所)。ハーバマースは、ディルタイを一方で評価しつつ、このように批判するのである。

第二は、ポスト形而上学的思考に関する議論である。十九世紀半ば以降、経験科学の権威は哲学に同化を強いることになった点に注目して、「哲学を自然科学や精神科学に、あるいは論理学や数学に同化しようとする試みのほうも、新たな問題を産み出した」と指摘し、「ディルタイや歴史主義は哲学を哲学史と世界観の類型学へと解体した」(五三頁) と批判している。もっともこの最後の批判の論点は、すでにディルタイとフッサールとの往復書簡から窺われる

Hosei University Repository

ような「学問的哲学対世界観学の哲学」という解釈図式を世襲しており、したがってハーバマース独自の見解ではない。

第三は、理論と実践との関係に関する議論である。ハーバマースは、「哲学が科学というシステムのうちへと引き戻され、他の専門科学と並ぶひとつの学問的な専門科目として確立されるにつれて、哲学は、ますます真理への特権的な通路であることを、理論の救済意味であることを断念しなければならなくなった」（六九頁）という現実を踏まえて、それでも哲学は、他の科学的分野とは異なり、理論以前の知識や生活世界の非対象的な総体に対しても、それなりの関係を維持している事実に注意を向けている。すると哲学は、こうした地点から科学全体を振り返り、諸科学の自己反省を押し進めることができ、それによって科学以前の実践のなかに科学的な理論形成の意味の基底を露呈させるのである。ディルタイからガーダマーに達する哲学的解釈学は、「生成と妥当とのあいだのこうした内的連関を明るみに出してきた」（七〇頁）。このようにして実践に対する理論の古典的な優位は、揺さぶりをかけられたわけである。

ハーバマースによるディルタイに対する評価と批判は以上である。端的に言えば、「言語論的転回」を除く上述の三つのモティーフ、「ポスト形而上学的思考」「理性の状況化」「実践に対する理論の優位の逆転」に関連した、ディルタイ評価は、おおむね厳しいものであった、と言ってよい。ディルタイの生の概念に対する把握は、批判の視点の相違はあってもリッケルト以降ハーバマースに至っても、依然として否定的であった。もちろん、ハーバマースのディルタイ評価と批判は、リッケルト、アーレントと比較すれば、はるかに綿密な考察に裏打ちされ、しかも公平であるように思われる。しかし、上述のようなハーバマースのディルタイの理解の仕方は、どこまで妥当であると言えるであろうか。本稿では、ディルタイの「生の体験」や「意識の事実」に論点を絞って、この疑問に対する暫定的な結論を導き出してみることにしたい。

Hosei University Repository

四　意識の事実と現象性の原理

ディルタイの哲学思想を全体的な視野のもとで的確に把握することは、二十一世紀に入り全集の刊行が着実に進行し、多くの研究成果が刊行されてきたにもかかわらず、依然として多くの困難に直面している。このことは否定できない事実である。その理由の一つとしては、ディルタイによる哲学的な概念の用語法が指摘できる。実際、早い段階から晩年に至るまでカントやヘーゲルの用語を自分独自の思想的表現の手段にすることによって、読者を混乱に陥れてきたからである。第二の理由としては、このような事実と関連してディルタイが自身の思索の成果である論文の刊行をしばしば中断して、一見したところ異質ともみられる研究に向かうことも少なくなかったからである。初期の大著『シュライアーマッハーの生涯』や中期の代表作『精神科学序説』なども、いずれも第一巻で中断しており、そのためディルタイは「第一巻の男」と呼ばれ、晩年に至り、弟子たちからも「謎の老人」とも呼ばれた事実は、その一端を窺わせるものである。

これらの事態は、ここでの主題である「意識の事実」や「現象性の原理［命題］」、「生の体験」の正確な理解を妨げてきたことにも、注意を促しておきたい。ディルタイの成熟した思想内容に即して解釈すれば、「意識の事実」も「現象性の原理」や「生の体験」も、「意識」「事実」「現象性」「生」「体験」などの概念の把握とともに従来の通説的な理解や解釈・評価とは対照的とも言えるほど異なっていることに気づかれるはずである。

さらに「歴史的理性批判」はディルタイ哲学の体系とみるべきか、それともプログラムとみるべきかについては、研究者の間でも、さまざまな議論をいまなお呼び起こしている。しかしディルタイは、『精神科学序説』第一巻（一八八三年）でカントの「純粋理性批判」の試みとアナロガスな「歴史的理性批判」の試みを企て、曲折や中断があっ

Hosei University Repository

たとしても最晩年までこのプロジェクトを維持し、発展させようとしたことは否定できない。これはすでに指摘したとおりである。『序説』ではこの試みは「意識の事実」(Tatsachen des Bewusstseins) の分析によって展開されている、と言ってよい。ここでは「意識の事実」は、自然科学とは区別された精神科学の哲学的原理を構築しようと企図した「歴史的理性批判」の内実を示している。ここでは「意識の事実」の分析によって、精神科学の事実から出発して、こうした事実を歴史的に説明し、人間の認識能力のうちにある精神科学の根拠、言い換えれば、精神科学の事実を可能にする主観的な条件を明らかにしようと企図している。この試みは、「意識の事実」が「確実な知識に対する最終的で唯一の審級」を解明することを意図していた、と言えよう。

しかし、このことはディルタイが「意識の事実」が伝統的な形而上学のように無条件的で絶対的な理論であることを主張した、と理解してはならない。ディルタイは、どこまでも経験を重視し、現実世界に根差して表象主義や主客二元論、意識の内と外の区別と不可避なアポリア、外界の実在性の因果的推論による証明などを斥けようとしてきたからである。『序説』第一巻では、周知のように理論重視の知性主義や表象主義の批判から開始されていた。「ロックやヒュームやカントが構成する認識主観の血管には現実的な血液ではなく、たんなる思考能力としての理性という希薄な液体が流れているだけである」(I, XVIII)。ところがディルタイにとっては「全体的な人間に従事する歴史学の営みは、認識や概念の解明もまた、人間のさまざまな力が錯綜しあって織りあげる多様性のうちに、つまり全体的な人間のその意欲し感じ表象する本質のうちに基礎づけることに導いていく」(Ibid.) ことを洞察していた。

このようにディルタイの哲学的思索の出発点は、全体的な人間本性であった。「この全体的な人間の本性の現実的な生のプロセスは、意欲や感情や表象においてさまざまな側面をみせるにすぎない」(Ibid.)。人間は歴史的現実のなかで生活するかぎり、認識の主体もまた、歴史的で心的な全体的な現実の統一体である。ではディルタイはやはり歴史主義と心理主義が陥る相対主義から免れないのであろうか。因みに、クルト・フラッシュは「ディルタイは生の哲

Hosei University Repository

学者ではなく、相対主義の危険に直面して驚愕した歴史経験の証人である」[14]、と指摘している。これらの疑問に答えることも含めて、「意識の事実」と精神科学の基礎づけの作業を執筆後ほぼ百年を経て日の目をみた資料を手がかりに、さらに考察してみたい。

一九八二年に全集版第十九巻に収録されて初めて刊行された『精神科学序説』第二巻の完成原稿（一八八〇年／九〇年頃執筆。いわゆるブレスラウ完成稿を含む）の第四部の第一編には、第四部「認識の基礎づけ」の第一章は「意識の事実」というタイトルが付され、その第一節は「現象性の原理」（Der Satz der Phänomenalität）と称されている。また、同じ十九巻には「生と認識。認識論的論理学とカテゴリー論の試み」（一八九二／九三年頃）が収録されており、そこでは従来それ以降の晩年の成果とされていた「生のカテゴリー」が約三十頁にわたり詳細に展開されている。これらの通説を覆すような新たな遺稿にみられるディルタイの思索の成果は、上述のハーバマースのディルタイ評価にもまだ反映されていないのである。

この第四部では、「意識の事実に関する学問は経験科学 Erfahrungswissenschaft である」（XIX, 81）という主張を含む論述内容からみて、たんに精神科学の基礎づけだけでなく、自然科学を含むすべての科学的知識と哲学的知の基礎づけが探究されている、と言ってよい。最初の章の冒頭部分で「現象性の命題」という原理とは、「すべては意識の事実であり、したがって意識の諸条件にしたがう」（XIX, 60）と言われている。さらに「これらすべての対象は、私が関係する人物でさえも、私にとっては私の意識の事実にすぎない。意識の事実は、そこから客観が成立する唯一の素材である」（XIX, 58）、と明言されている。

ここでまず注意すべきは、この原理がすべての事物を人間の意識に還元する懐疑主義的な現象主義でも、現象と物自体との区別に依拠した現象のカント的な表象主義でもないという点である。また、この意識を超越論的な意識とも、経験的な意識とも理解してはならない。実際、ディルタイは意識は定義できないと考えており、「意識をそれ以上の

Hosei University Repository

分析が不可能な究極の所与として提示できる」（XIX, 59）だけである、と述べている。このような意識に与えられたものを「意識の事実」として、その客観的な確実性のうちで捉える意識のあり方が「覚知」（Innewerden）と呼ばれる働きである。この働きは、意識そのものを客観化しうる内的観察、内省とは異なる。自我の内的観察では、主観のうちに主観と客観との対立構造が見いだされる。ところが、「覚知」（気づき）では、なにかに向かう意識、なにかが与えられている意識の働きに即した、こうした働きに気づくのである。したがって「覚知」では作用と対象とがひとつである、と言ってよい。また、外界や他者と自己との区別も、すでにこの意識の事実のうちでは統一されている、と言えよう。ここでは自己と世界とは根源的に等しく与えられた統一性をなしていることが主張されているのである。「覚知」とは、たんなる意識を超えた働きであり、主観と客観、作用と内容、形式と実質との間のあらゆる反省的な区別に先立つ働きである。

こうしてみると、いわゆる『実在性論考』（一八九〇年）と呼ばれる『外界の実在性についてのわれわれの信念の起源とその信念の正当性とに関する問いを解決することへの寄与』の第一章では、「現象性の原理」というタイトルが付されて「哲学の最高の命題は現象性の原理である」（V, 90）、と宣言されているのも、納得のいくところであろう。しかし、それにしても「意識の事実」という表現や意志・感情・表象という心の働きの三区分もまた、カント以来の伝統的な概念の呪縛から完全に免れているとは言えないのではないか。そのため、ディルタイがどれだけ伝統的な形而上学的思考法との断絶とその克服を意図しても、その意図や狙いは十分展開できないのではないか。実際、後期の著作になると哲学の最高の原理と言われた「意識の事実」という表現は、姿を消してしまうのである。この事実に関しては、色々な解釈が可能であり、「意識の事実」は晩年まで依然として前提された原理であるとみなすか、それとも「体験」の概念によって無効になった命題であるかについては、ディルタイ研究者の間でも見解の相違がみられるが、ここではこの問題に立ち入る余裕はないので、先を急ぐことにしたい。(15)

Hosei University Repository

なお、やはり遺稿『生と認識』でも「思考は生の過程である」こと、「生は構造である。構造は生の連関である。（中略）生の反復する経過のうちで生の統一体の分節化（Artikulation）が明瞭な意識にもたらされ、生のカテゴリーが解明される」（XIX, 355）、と生の統一は構造的連関のうちにあることが主張されている。ここではまた、「生の分節化」が説かれており、それによって精神科学の基礎づけの試みは、心理学的なレベルから生物学的レベルへと拡大されている、という解釈も成り立つ。しかし、それでも九十五年／六年には（『比較心理学』）、生物学的な基礎づけは放棄されているとみられる。[16] しかしながら、ここでの議論は、人間の生は、歴史的・社会的・文化的に形成され心的構造の他の契機と連関しながら分節化されて発展する、と理解すべきであろう。したがって上述のリッケルトのディルタイ批判は、厳密に言えば、妥当しないと言わなければならない。

五　生の体験

初期のディルタイは、晩年とは異なり体験と理解とを明確に区別しようとしていなかったようである。心的生の全体性を探究する際に、体験と理解は心の連関を直接的に把握する役割に関して明確な区別がないと思われる。ところが『解釈学の成立』（一九〇〇年）になると、個性的なものの理解を普遍妥当性にまで高めることの可能性という精神科学に固有の問題に取り組み、自然認識にはない利点として「精神科学の対象は、直接的で内的な現実そのものであり、しかもその現実は内から体験された連関にほかならない」と触れているだけである。

全集第六巻の最後に収録された『詩学への断片』（一九〇七／〇八年）では、ディルタイの「体験」のもつ特徴がきわめて生き生きと描出されている。「愛する人の死は、構造的に特別な仕方で苦痛と結びつけられている。ひとつの苦痛が、私が苦痛であると感じているひとつの対象に関連した知覚や表象と、このように構造的に結合しているこ

Hosei University Repository

とがひとつの体験なのである」（VI, 314）。ここでは「体験」とはそれ自身が内的な構造をもち、この構造のうちでは知覚・把握・感情・思考・意志のもろもろの作用がひとつに結びあわされて、分節化されたひとつの全体をなしていることが語られている。そして、このような体験を把握する概念的な形式が、「生のカテゴリー」の働きであった。この生のカテゴリーは、自然の世界の説明に使用されるカテゴリーとは異なり、歴史的世界の理解の際にきわめて重要な役割を果たしていることをこの機会に付け加えておきたい。

これまでの説明からも明らかなように、ディルタイの「体験」は、通常理解されるような主観的な意識状態ではけっしてない。ディルタイにとって「体験」は、意識の志向性でも意識の同一性でもなく、それらの根底にある対象意識の根本的な前提を意味する。つまり「体験」のもつ構造は、統一性と対象との関係だけでなく、唯一性や普遍妥当性という契機もまた、合わせもっている、とみられる。さきにディルタイによる「意識の事実」の分析の意図するところをみた。ここではディルタイはやはり「体験」のうちに含まれているものの分析（分節化）が重要な課題となる。体験という出来事が唯一であり、普遍妥当的であることは、外界の実在性を否定するという想定によって反駁され破棄されるのである。なぜなら、そう考えるならば、抵抗しがたい力をもって実在性が私に現前するからである。ディルタイは、外界の存在を証明することが不可能であり、むしろそうした証明は不要である、と主張しているのである。また、こうした外界と意識との関係は、実践的な関係であることも明らかであろう。

自然科学と精神科学との学問的な区分についても、体験の統一性から派生的に導き出される自然と精神との二元的な区分と同様に、根源的な存在論的な区分とみてはならないことが帰結する。外界と意識との区分は、生の連関のうちで体験されたものを認識主体の態度の相違に依拠させる。「自然は体験をとおして人間に現に存在してくる」（VII, 93、『精神科学における歴史的世界の構成』一九一〇年）からである。他方、精神科学は、体験や表現、理解によって成り立つ連関のうちへと認識しながら深く入り込むことによって、たんなる生物学的な生命から「精神」となるプ

Hosei University Repository

ロセスを実現する。したがって精神科学全体は、生による生自身についての学問的な自己意識である、と言ってよい。生は、その体験と表現と理解とからなる連関に基づくかぎり、生の構造連関は、表現構造と理解構造とをもっている。この点からみても、ディルタイの生は、たんに生物学的な生や生命とは異質であることを看過してはならないであろう。

このようにして歴史的な知識の仮説的普遍性もまた、解釈学的方法によって可能になった。最晩年の遺稿で『精神科学における歴史的世界の構成の続編草案』には「歴史的理性の批判のためのプラン」という副題が付せられているが、こうした構想は、生の客観態を解釈することによって、われわれの知識は拡張して、体験されている所与以上に及ぶことができる。理解は、初期から晩期までの間には見解にズレがみられるが、まずはじめに個人の体験から出発して、自己理解から他者理解、「理解が多くの人々や精神的な想像や共同体へと伸び広がるにつれて、個人の生の地平は広がり、共通なものをつうじて普遍的なものへと導く」（VII, 141）。こうした普遍的な知識によって理解の学問性、科学性は保証されることが可能になる、とディルタイは考えたのである。

六　生の批判的概念

以上のように歴史的理性批判の試みは、歴史的現実の生の自己解釈、自己省察（Selbstbesinnung）の試みでもあった。この「自己省察」もまた、発展史的にみて多義的である。まず「認識論的」（XX, XXXI. 編者序論）であり、次に「歴史的」（XX, 237）であり、「社会の自己省察としての哲学」（XIX, 304.『序説』第二巻の全体計画三部）や「人間学的省察」（XX, 236）を意味した。そして歴史的理性批判の射程の拡大・変容とともに解釈学的含意を強めていく。そこでこの試みによって明らかとなったディルタイの「生」の概念を現代的な文脈から位置づけ直すならば、どのよ

Hosei University Repository

うに表現できるであろうか。その理解について、ディルタイ哲学のうちに窺われる知の仮説的普遍性の説明を兼ねて、さらに立ち入って考察することにしたい。

第一に、生の自己解釈は個体的（individuell）である。なぜなら、この自己解釈はつねに「一つの生き生きしたもの」「生動的なもの」（Lebendigen）から出発するからである。この自己解釈は、あの個体的な生の諸条件の下で一つの個体的な生の統一体（Lebenseinheit）の自己解釈にほかならない。この統一体が一人の人間、他者や特定の社会や集団、人類全体を包摂する「生の独特のシステム」であったとしても、この作用連関は「自己自身に中心をもつ」統一的な主体である。生は内部からのみ把握可能であるという規定は、個体性というモメントによって表わされている。生はこのように解釈可能である。

第二に、生の自己解釈はパースペクティヴ（Perspektive）をもつ。なぜなら、諸々の生の統一性は、それぞれが生を限界づける諸構造によってのみ、存立することができるからである。また、これらの構造から生の統一体は、それぞれが生の諸条件を解釈する。要するに、諸々の生の統一体は、ある限界づけられたパースペクティヴのうちですでに諸構造、歴史的諸条件を解釈している。「生の地平（Lebenshorizont）」（VII, 177）とは、このようなあり方とみることができる。「この言葉は、ある時代に生きる人間の思考、感情、意欲等と関連する限界づけ（Begrenzung）と理解する」（VII, 177f.）。生は包括的な全体であり、すべてがその関係のなかで理解され、人間は生の背後に遡ることはできないのである。

第三に、生の自己解釈は仮説的（hypothetisch）である。なぜなら、生の諸条件の限界づけられた解釈は、つねに除外され排除された生の諸条件が、そのパースペクティヴには侵入することを予想しなければならないからである。生の諸規定は、つねにある未規定的なものによって制限されているかぎり、こうした規定は上述の意味で仮説的である。つまり、「生の意義についてのわれわれ［人間］の把握は、未規定的なものへと流れ去る」（VII, 233）のである。歴

Hosei University Repository

史的生の現実の解釈は、自然主義的意味で客観的ではなくても、このようにして他者への普遍性を仮説的に求めることができるのである。

第四に、生の自己解釈は再帰的（reflexiv）である。なぜなら、一つの生の意義についての人間の把握の変更は、次のことによってのみ経験することができるからである。つまり、一つの生の統一体は、自己のパースペクティヴの内容から、そのパースペクテイヴの立場を分離することによって、あるいは自己を世界から分離することによって、そうした変更が経験可能となるからである。この場合、この分離もまた仮説的であるから、この生の統一体は、自己自身を同時に世界の部分として経験し、同様に生がその世界を規定するように生の世界から規定する。ある個体の生の統一性の自己解釈の再帰性（Reflexivität）は、個体的な生の統一性が生の自己関係性を経験しうる仕方を意味する。自己と外界との作用連関は、こうした人間の生の歴史的現実のあり方を表現している。自己は、他者や世界とそのような「生の交渉」を行なうなかで自己を見いだすのである。[17] このようなあり方は、個人から共同体のレベルまでもみられるはずである。

第五に、生の自己解釈は不可逆的（irreversibel）である。なぜなら、生の自己解釈はつねに創造的で形態をなしているからであり、生の統一体に対する反省もまた、この生のうちで一つの通路でもあり、それによって生を引き戻して変化させることがないからである。この意味で生の把握は「決して完結しない一つの関係である」（VII, 233）。[18] 実際、生はある方向に向かって発展し、ある形態（人格や性格）を形成するよう、つねに自己自身を超えていくという内在的傾向を有する。生はまた、記憶の働きにより生の体験に客観的意味を与える。記憶のなかで自伝を書くひとは「意義あるものとして経験した自己の生の瞬間を紡ぎ出し、取り出して他の瞬間は忘却の淵に沈める。その場合、ある瞬間の意義の錯覚を正したのは未来である」（VII,200）。歴史的な生の体験の世界は、こうした構造をもつ、と解することができる。生の体験・表現・理解という解釈学的原理は、こうした生の構造連関の自己解釈のあり方に他なら

Hosei University Repository

ない。

こうした解釈の構造は、「記憶の場」や他者理解の問題を含めて共同体的・人類的レベルまで到達可能な「自己省察」の機能によって解明される歴史的現実の作用連関の具体相とみることができよう。

七　結語に代えて：歴史的理性批判の意義

最後に、先に指摘したハーバマースのディルタイ評価とこれまでの考察の成果とを突き合わせることによって、歴史的理性批判の試みの射程を測定し、そのアクチャリテートをいっそう明らかにしてみたい。

まず第一に、ディルタイは、生涯をつうじて継続した「歴史的理性批判」の試みのうちで、哲学と経験科学とのある新しい関係性を発展させた。この関係性のうちでは、哲学はその特権的な地位を放棄しなければならず、また哲学は経験科学ときわめて親密に連携して働かなければならないのである。[19] 哲学の形而上学的な原理や超越論的な基礎づけの試みは、もはや存立しえないからである。

第二に、ディルタイは、人間理性からそのアプリオリで抽象的な性格を奪った。このことは、理性の有限で歴史的な性格を強調することによって成し遂げられたのである。それでも、歴史的理性は、経験諸科学の知のあり方とその源泉である生の体験との自己省察の営みによって、歴史主義に不可避であるといわれる相対主義化を克服しようとする努力を遂行したのである。今日、歴史の物語り論からも改めて注目されている自伝やオーラル・ヒストリーの意義についても、上述の自己省察に基づき、「この省察だけが歴史的洞察を可能にする」（VII, 201）ことにディルタイは気づいていたのである。

第三に、ディルタイは理論と実践との古典的な関係性を逆転させた。これは、すべての認識の根源が日常生活のう

Hosei University Repository

ちに基づくべきであるということを露わにすることで成し遂げられたのである。その意味では、ディルタイの精神科学理論を「実践哲学の転換」の試みと解釈することは、的を射ていると思われる。[20] それはたんに理論と実践との関係の優位性の転換を意味するだけでなく、両者が根源的に不可分であり、人間の生にとって精神科学も自然科学も不可欠の知であることを意味した。ディルタイは、こうした事態を洞察していたのである。

第四に、ディルタイは主観性の哲学と主客二元論を克服しようとする試みを企てた。この企図は、デカルトやライプニッツ、カント以降の現代の哲学者にもみられる西洋哲学を支配してきた意識哲学を乗り越えようとする意欲的な試みであった。生の批判的概念の考察の成果は、このことを明瞭に示している、と言えよう。

第五に、ディルタイは、自然的な外界と人間的な共同世界との実在性の問題をめぐって、近代の認識論の対立する極端な二つの見解、つまり懐疑論と独断論の批判を展開した。[21] この試みは、今日「実在性」「リアリティー」をテクストやコンテクストのうちにのみ見いだすポストモダンの思想家たち（例えば、ボードリヤールやデリダなど）に対する批判的な反省の視座を提供している。視覚重視の近代的思考法に対して触覚の重要性や身体の意義に言及したディルタイの思索からも、なお学ぶべきことは残されている、と言ってよい。[22]

第六に、生の批判的概念の再帰的な自己解釈の試みからも明らかなように、近代的なシステムや構造の強靱な固定性や、逆に近代的な主体性および自由な行為に関する楽観主義的な解釈をも克服しうる今日的な含意をディルタイによる「歴史的理性批判」の試みの成果から読み取ることが可能であろう。

こうしてみると、ディルタイに対するアーレント、リッケルトの批判はもちろん、「歴史的経験の歴史性」を洞察できず、「有限な歴史的人間の立場の拘束性」を忘却したと指摘したガーダマーのディルタイ批判や、[23] こうした批判に依拠したハーバマースの評価もまた、妥当性を欠く見解であることは明らかであろう。しかし、彼らに限らず、哲学および哲学史研究者の圧倒的多数は、依然としてハーバマース以上に伝統的なディルタイ解釈のカノンに依拠して

Hosei University Repository

いるように思われる。この事実は、すでに冒頭部分で指摘したように、ディルタイ解釈上の問題にとどまらず、今日の学問論と人生論との乖離状態を統合しうる哲学的思索を展開する場合に、少なからぬ障害となり、生・生命・人生に対する哲学的考察の方法や視座を狭める危険性を孕んでいるように思われる。

以上の考察によって従来のディルタイ像の変貌の一端を示すことができ、これらの課題の取り組みに対して些かでも示唆的な観点を提示することができれば、本稿の目的は果たせたことになるであろう。[21]

脚注

(1) ドイツ語版全集は、これまで二十三巻まで刊行されてきたが、二十二巻のみ未刊である。なお、二〇〇三年八月現在、ルーア大学ディルタイ研究所のローディ教授による最新情報によれば、刊行助成金の減額により、全三十巻の計画が二十六巻までに縮小され、残りの書簡集については別企画で進められる見通しである。

(2) H.A.Hodges, *Wilhelm Dilthey: An Introduction*, London 1944.

(3) Hannah Arendt,Dilthey as Philosopher and Historian, in: *Partisan Rewiew*, XII/3. 1945, pp.404-406.

(4) Arendt, *The Human Condition*, Chicago 1958. 志水速雄訳、ちくま学芸文庫五一九頁。

(5) Wilhelm Windelband, Kritische oder genetische Methode ?, 1883, in: *Praeludien*, 7. Aufl. Bd. 2., Tübingen 1921, S.120.

(6) Heinrich Rickert, *Die Philosophie des lebens*, Tübingen 1920, S.46.

(7) 拙論「歴史のなかの実存の物語り」(「実存思想論集 XIX」所収二〇〇四年六月、実存思想協会編、理想社)を参照。ここでは紙幅の制約上、この論点には立ち入らないことにする。

(8) *Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften* Band V. Die Geistige Welt.Einleitung in die Philosophie des Lebens.Erste Häilfte. Abhandlungen zur Grundlegung der Geisteswissenschaften.「解釈学の成立」、「哲学の本質」「実在性論考」、「記述的分析的心理学」等所収。以下、ドイツ語版全集からの引用は、原則として本文中に巻数はローマ数字で、頁数はアラビア数字で表わす。

(9) Vgl.Matthias Jung, *Dilthey zur Einführung*, Hamburg 1996, S. 195-200.

Hosei University Repository

(10) Vgl. Gunter Scholtz, Dilthey, Cassirer und die Gesichtsphilosophie.in: Thomas Leinkauf (Hrg.), *Dilthey und Cassirer*, Hamburg 2003, S.128.

(11) Vgl. Jurgen Habermas, *Nachmetaphysisches Denken. Philosophische Aufsätze*. Frankfurt a. M. 1988.3. Aufl., 1989.

(12) したがって「コミュニケーション的行為の理論」その他の文献は、今回は考察の範囲から除外する。なお、これらの問題については次の文献を参照。Vgl. H.Johach, Lebensphilosophie und Kritische Theorie. Zur Dilthey-Rezeption der Frankfurter Schule, in: *Dilthey-Jahrbuch*, Bd.5, 1988, S.200-239.

(13) Vgl. Habermas, *a.a.O.*, 3.Aufl.,S.14ff., S.28, S.48, S.44, S.58. 以下、本文中には訳書（藤沢賢一郎他訳、未来社）の頁数を明記する。

(14) Kurt Frasch, *Philosophie hat Geschichte*, Bd.1., *Historische Philosophie Beschreibung einer Denkart*, Frankfurt a.M. 2003,S.330.

(15) 前者のいわば連続説には、ローディの解釈、後者のいわば廃棄説は、ボルノウの解釈、また中間的な解釈には、リーデルの名前を挙げることができよう。Vgl. Frithjof Rodi, Diltlys Kritik der histolischen Vernunft-Programm oder System? in: *Das strukturierte Ganze*, Göiingen 2003, S.36-65.

(16) 日本語版ディルタイ全集（編集代表 西村晧・牧野英二）、法政大学出版局、第三巻・大野篤一郎「解説」一〇〇一頁参照。

(17) 再帰性については、拙論「理性批判の二つの機能」『思想』二〇〇二年、三月号参照。

(18) Vgl.Werner Stegmaier, *Philosophie der Fluktuanz. Dilthey und Nietzsche*, Gättingen, 1992, S.168f.

(19) Vgl. J. de Mul, Der Fortgang über Kant.Dilthy and Transformation of Transcendental Philosophy.in: *Dilthy-Jahrbuch*, Bd. 10 1996. S.80.

(20) Vgl. Manfred Riedel, Hermeneutik und Erkenntniskritik, in: *Verstehen oder Erklaeren ? Zur Theorie und Geschichte der hermeneutischen Wissenschaften*. Stuttgart 1978. S. 66ff.

(21) Vgl. Riedel, *a.a.O.*, S.71.

(22) 拙論「実在性の復権に向けて」『理想』特集「ディルタイと現代」、二〇〇一年一月号所収。拙著『カントを読む　ポストモダニズム以降の批判哲学』岩波書店、二〇〇三年一月などを参照。

(23) Vgl. Hans-G.Gadamer, *Wahrheit und Methode*, 2. Aufl., S.228, S.221.

(24) ディルタイ哲学を「生の解釈学」（ボルノウ）と呼ぶべきか、「歴史的・解釈学的な生の哲学」（geschichtlich-hermeneutische Lebensphilosophie）と呼ぶのが適切かなどについては、たんにディルタイ解釈上の子細な問題ではないことも明らかであろう。Vgl. Hans-U. Lessing, *W.Dilheys >Einleitung in die Gesisteswissenschaften<*, Darmstadt 2001,S.16. また、ハーバマースが見逃したディルタイにおける身体や触覚の重視の思想や「言語論的転回」との関係に対する考察は、別の機会に譲ることにする。

Hosei University Repository

付記

本稿は東北哲学会第五十三回大会・シンポジウム（二〇〇三年十月十八日、於 東北学院大学）において、同名のテーマで口頭発表した内容に加筆修正したものである。非会員の筆者を提題者としてお招き下さった東北哲学会会長柏原啓一・東北大学名誉教授をはじめ、大会前後様々にご配慮下さった野家啓一・東北大学教授には改めて謝意を表する。また、同じく提題者を務められた竹田純郎・金城学院大学教授と当日司会役を務められた岩谷信・東北学院大学教授にも感謝申し上げたい。

尚、本稿の作成にあたっては平成十五年度科学研究費補助金・基盤研究（B）の助成を受けた。

Hosei University Repository

Zur Aktualität der Philosophie Diltheys

Die Tragweite der Kritik der historischen Vernunft

Eiji MAKINO

Diese Abhandlung unternimmt den genetisch-systematischen Versuch einer Rekonstruktion von Wilhelm Diltheys „Kritik der historischen Vernunft".

Dilthey wollte „die Kritik der historischen Vernunft" in seinem unvollendet gebliebenen-systematischen Hauptwerk, der „Einleitung in die Geisteswissenschaften" (Erster Band,1883), entwickeln. Aufgrund der in den Bänden XVIII,XIX und XX der „Gesammelten Schriften" Diltheys zugänglich gewordenen Texte untersucht diese hier vorgelegte Abhandlung die geplante systematische Fortsetzung des Ersten Bandes der „Einleitung" zu rekonstruieren, um so das Gesamtkonzep von Diltheys erkenntnistheoretisch-logisch-methodologischer Grundlegung der Geisteswissenschaften hinsichtlich ihrer Struktur und ihrer leitenden Philosopheme darzustellen. Damit werden die Tragweite der „Kritik der historischen Vernunft" und die Aktualität der Diltheys Ideen zu einer geschichtlich-hermeneutischen Lebensphilosophie erleuchtet.